

高校生らしくファーストキスに夢を見ていたのかもしれないが、それを奪ったのは静雄だった。これは帝人にとつては大問題だろう。が、静雄はいえ、申し訳ない、と思うよりも嬉しい、という気持ちの方が圧倒的に大きかった。彼の初めてのキスが、自分で嬉しい。

ああ、と思う。

わかった。わかってしまった。

この、感情の名前。未確認のままでも良かったはずなのに。(そっか、俺は)

帝人を見つめ、静雄は小さく笑みを浮かべる。

(こいつに惚れてんだな)

——これは、恋だ。

「なんでそこで笑うんですか」

「何でだろうな」

理由はわかっていたが、そう言うてから悪かった、と彼の頭を撫でる。

「なんかこう、つい、な」

「つい、でキスしたりしないでください……」

浮かべているのは、怒っているような、拗ねているような、惑っているような、それでいて脱力しているような、そんな複雑な表情だった。

「悪かったって。なあ、今日の晩飯なんだ？」

「……肉じゃがです。ジャガイモがセルだったんです。もうできてますから着替えてきてください」

「ああ」

未だ心の片隅に帝人に傷を負わせた相手への怒りはあるが、意識の大半は認識したばかりの恋心に捕らわれていた。同性の少年。どう考えても、本来は恋する相手ではないはずだった。けれど。

(好きになっちまったもんは、仕方ねえよな)

だって帝人はどうしようもなく可愛い。魅力的だ。気がついたら、恋してしまうほど。それも当然だと、静雄は開き直るように思う。

だってこんなにも帝人は可愛いからだ。これは不可抗力だ。彼が可愛いのが悪い。そんな滅茶苦茶な理論が展開される。それは静雄の中ではこの上なく正論で正義だ。だから、仕方がない。

自覚してしまえば、納得するばかりだ。自分に同性愛の気があるとは思わなかったが、この場合、たぶん帝人だから恋をしたのだろう、と思う。彼が彼でなかったら、きつと恋などしなかった。彼だから、惹かれた。たぶん、そういうことだ。

頃合いを見計らって買ってきたデザートを差し出すと、帝人は『これで許してあげます』と言った。

どうやら、キスの代価はデザートでチャラにしてもらえららしい。

(なら、毎日デザート買って帰ればキスして良いのか?)
つい自分に都合良く考えてしまったが、さすがにそれはないだろう。帝人にしてみれば、今の生活は彼にとってメリットがある。